佳作

息子への「愛してる」が上手に言えるようになった絵本

大澤　知子

はじめまして、こんにちは。はじめましての先生にこんな話をするのも何なのですが、私の大好きな絵本との出会いについて、話させて下さい。

私がその絵本と出会ったのは、息子が三歳になる少し前の母の日でした。

私は家の中の何もかもに苛立って、息子も家事も全てを夫に託して家を出ていました。

仕事もしていない専業主婦なのに、家事も子どもも投げ出して一人外出なんてして、その事実がさらに私を憂鬱にさせていました。

しかし、一人で外にいても、結局は息子に関わる場所に行ってしまうもので、この日も、本屋に“置き去り”にしてしまった息子への“償い”のような気持ちで、何か良いプレゼントはないかと探しに行っていました。

そして、出会ったのが「ママの小さなたからもの」でした。

母の日の特集コーナーで、たまたま手にとって、本を開き、読み始めてから、本を閉じられなくなり、本屋にもかかわらず震えるくらい涙が止まらなくなってしまいました。

その本の中には、その時、私が息子に本当に伝えたいけれど伝えきれていない事がたくさん書いてあったのです。

「ママはぼうやにはじめて会った時から

ずっとぼうやを愛している

いいえ、ぼうやに会う前からずっとよ。」

「愛されるってわかるでしょ？」

そうじゃないかもってきみが感じる時だって、ママはぼうやを愛しているのよ。」

ぼうやが元気で良い子にしている時だけでなく、良くない事や失敗をしてママを困らせたり怒らせている時でさえ愛していると、いろいろな場面を対照的に描写して伝え続けるこの作品が、その時の私の気持ちを丸ごと代弁してくれていました。

息子を夫に預けて離れて過ごしていたって愛している事に変わりはないのよと。息子のどんな表情も行動も愛おしくて仕方ない。おふざけがすぎている時だって、大声を出してお菓子が食べたいと叫んでいる時だって、お友達とおもちゃを取り合って泣いている時だって、本当は愛しているんだよと。だけど、おふざけがすぎて車にひかれそうになるし、お菓子を食べすぎたら栄養が偏ってしまうし、おもちゃが壊れてしまったらもっと悲しくなるし、私は息子に怖い顔をしなくてはならない時があります。そんな事が連続的に起こると、つい愛しているという気持ちを表面に出せなくなってしまう。ただただ息子を注意することに夢中になってしまう事だって。ずっと怖い顔をしていて、自分の中の愛に疎くなってしまっていました。

もちろん、この時の憂鬱な気持ちは息子だけでなく夫や溜まった家事など諸々の事も原因ではあったけれど、ずっと長らく心の中でこんがらがっていた息子への気持ちが、この絵本を読んで、すっと解けて楽になりました。

「早く家に帰って、息子に読んであげたい。
読まなければ。」
そう思い、本を片手に早々と家に帰りました。
この絵本に出会ってから、息子を叱る時が来ても必ず最後に「どんな時だって愛しているよ」と付け加える事が出来るようになり、自分の中の息子への愛を忘れないようになりました。
最後に、この絵本の終わりにははっとさせられる一文があります。
「ぼうやはママの愛する子供だけれど、
でもね、ぼうやは決して
ママのものにはならないって分かってる。これだけの愛をもっても、根本的には別々の人間で、自分のものではなく、しっかりと本人を大事に見守るような、絶妙な距離を尊重したい一節です。いつかは巣立っていく事を噛み締めて、一緒にいられる時間を大事にしようと思えました。
私はこの本がとても好きで毎日でも読み聞かせをしたいのですが、当の息子はあまり好きではなく読ませてくれません。まだ息子にはあまりわからないのだろうと思うと、それもまた感慨深いです。いつか息子もこの本が好きになってくれたらいいなと、その時までいつでも手の届くところに置いておこうと思っています。
長くなりましたが、私と絵本の話を読んで下さりありがとうございました。